斎藤勇さんの思い出

書棚を整理していると、斎藤勇「自分史的回想」が出てきた。『東海近代史研究』第17号、1995年の抜刷コピーだ。「95・11・2記」とあり、20年前に書かれたものだ。懐かしいので、すこしでも紹介しておきたい。

「この3月で43年間の教員生活を閉じる。この機会に、来し方の心覚えを綴ってみようと思う」から始まる。斎藤さんは小学校卒業直前に海軍省給仕に採用され、大臣官房に配属され、毎日海軍将校と接した。1943年、山本元帥の国葬を日比谷沿道で見送って、12月に江田島の門をくぐった。1945年、海兵75期の斎藤さんは、母と妹たちの疎開先山梨県に復員した。その後、八ヶ岳山麓開拓団への道か、学校教育のやり直しの道か迷ったが、旧制第一高等学校に入り寮生活を送る。

1950年、名古屋に。名古屋大学経済学部で、渡辺信一教授ゼミに1年から特別参加が許された。その年、信夫清三郎さんが法学部教授として赴任され、お城にも受講しにいった。53年4月、農業政策講座の助手に採用された。58年4月、創設間もない日本福祉大に就職した。その後、60年代末から80年代半ばまでは名古屋市立女子短大、87年に愛知大学に移る。「96年4月から、私は自分の世界を自分できりもりする。隠居やひっそくするわけではない」と結んでいる。

研究や大学改革のことなどを省いたが、「自分史的回想」から、斎藤さんの足跡をざっと辿ることができる。斎藤さんと親しく呼ばせてもらっているが、私に大きな影響を与えた先生であり、大先輩である。でも、「飲み仲間」「昼メシ仲間」であり、斎藤さんと呼ばせてもらった。短大時代、斎藤研究室で毎日のように昼メシを一緒に食べた。斎藤さん手作りの味噌汁を味わいながら。その時に聞いた話の多くが、この「回想記」に書かれている。戦争時代のこと、戦後の高校生活から名大時代、そして福祉大から女子短大での研究と教育、大学改革のことなどだ。

斎藤さんから多くのことを学んだが、何といっても新聞をじっくり読み、スクラップすること、マスコミへの関心である。新聞のスクラップは、斎藤さんを真似て、退職後も続けている。写真は1980年に中部読売新聞社から出版された斎藤勇『私の社会時評』だ。75ページの「新書」ながら、示唆に富む論稿だ。これと似た拙著が、一昨年に出版した『災後の新聞』である。

斎藤さんが私に与えた影響がいかに大きかったかと、つくづく思う。

(2016年1月19日)